

Let's Know Hiroshima Castle.

しろうや! 広島城



No.50

「しろうや!広島城」今回で50号 長年のご愛顧ありがとうございます

平成16年度に発行が開始されました「しろうや!広島城」は、今回で節目の50号となりました。今後も引き続きよろしくお願ひします。そして今回、お休みしていました「わたしのおすすめスポット」(第23号

以来)と「おしえて!広島城博士」(第26号以来)を復活させました。これからも、毎年4回発行してまいりますので、今後ともよろしくお願ひします。

寄贈写真から二代目天守の謎が解明

ちょっと不思議な広島城天守



先般、市民の方が撮影された写真の寄贈がありました。この写真の被写体は、南東~東側から撮影した広島城の天守です(写真上)。しかし、よく見ると現在の天守とは異なった雰囲気があります。下見板張は軒下まで広がっており、全体的に黒っぽく、鯨は大きく、直立するような感じです。破風の形もかなり違和感があり、窓の形も少し異なっています。また、石垣の隅まで建物は建っていない様子で、全

体的に一回り小さく見えます。写真の裏に撮影日は「昭和26年(1951)5月15日」と記載されていました。この天守は、昭和6年(1931)に国宝に指定された後に原爆で倒壊した天守(写真下)でも、昭和33年(1958)に再建された現在の天守でもない、木造で造られた仮設天守なのです。

この天守は、広島国体の開催に先立って昭和26年3月25日から6月3日の間に広島城跡一帯で開催された体育文化博覧会(通称・スポーツ博)に合わせて造られたものです。秋季まで開催された広島国体終了後に解体したと考えられますので、わずか半年程度しか建っていなかった幻の天守なのです。



復興途上の広島城の意味

広島は、昭和20年(1945)の原爆の惨禍から立ち直り、昭和20年代中頃には少しずつ市民生活が落ち着き、復興に向けた歩みが進むようになっていきました。それとともに、市民は目先の生活再建だけではなく、新しい娯楽や文化へ目を向ける時期になっていきました。こうした動きの中で、昭和25年

(1950) からペナントレースに参加した広島の子民球団カープは、原爆で打ちひしがれた広島子民に勇氣と希望を与えたのです。

そしてその翌年、博覧会の一環で広島の象徴的存在として再建されたこの天守も、戦前にはあったものだけに子民に郷愁を呼び起こし、かつ夢と希望を与える存在でもありました。これらは、原爆によって失われた、もしくは忘れかけていた広島人としての誇りを取り戻す大きな役割を果たしたと考えられます。

この天守の出来栄は本来のものとは異なりませんが、仮設の建設を通して広島復興の一翼を担った人々の意気込みは、決して過小評価してはならないと思います。戦前の国宝と現在の天守に挟まれた存在ですが、単なる仮設の天守ではなく、一時的ではあれ復興のシンボルとしてよみがえったことからこそ、以前「しろや!第9号」で特集を組んだ折りに、「二代目」という称号を付けたのです。二代目天守は、広島城の歴史を語る上で価値は大きいと改めて感じます。

スイッチ・バック・レールウェイの乗り場発見



さて、寄贈写真には、注目すべきポイントがあります。天守の東側に写っている「スイッチ・バック・レールウェイ」についてです。この乗り物は、今でいうジェットコースターのようなもので、体育文化博覧会の目玉アトラクションの一つとして、子民が撮影した写真が複数確認されています。特に天守の南面(正面)や南東から撮影した写真(写真上・個人蔵)は天守の入口であったため、子民が天守とともに乗り物を写した家族写真などが特に多く残されています。しかし、不思議なことに「スイッチ・バック・レールウェイ」の乗り場がどこにあったかは長い間確認できませんでした。

ただ、天守の東側真横から子民が撮影した写真を以前拝見した折、建物もしくは^{ひさし}廂のようなものが写っ

ていたことから(写真下・個人蔵)、この場所が乗り場であると推定していました。今回の写真は、私たち広島城職員が長年探し求めていた「スイッチ・バック・レールウェイ」の乗り場が写真の右側にはっきりと写っており、その推定を決定的なものとする意味を持っています。廂の前に「スイッチ・バック・レールウェイ」の乗車待ちのために群がる沢山の人々、乗り物に楽しそうに乗っている様子を見ることができます。娯楽やイベントが少なかったこの時期、また、ジェットコースターすら本格的に日本に入る前に、こうした乗り物に乗車することによって子民が得た感動はいかなるものだったのでしょうか？



城に対する子民の意識

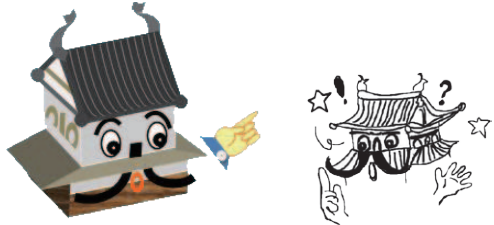
現在の三代目天守の再建の陣頭指揮を執った広島市役所営繕課(再建当時)の松本正夫氏は、戦前に横川駅から広島駅へ向かう鉄橋から見た広島城の風景を「格別で天下一品であった」と回想録で述べています。その松本氏が、昭和21年(1946)に戦地から復員した時には「全くの廢墟で広島城は城跡としての石垣のみであった」と、その喪失感を述べています。広島の子民として君臨していた天守を失った広島子民の思いは、想像を超えたものであったと思います。そうした時代に生まれたのが、この二代目天守であり、その思いを受け継いだのが三代目天守なのです。

折しも本年、熊本地震により熊本城が大きな被害を受け、熊本県人のみならず全国の人々がその変わり果てた姿から在りし日の様子に思いを馳せ、その復興を注視しています。熊本城が改めて熊本市のシンボルであることを示している事例ですが、広島市は戦前にシンボルだった広島城が、復興のシンボルとしてよみがえった歴史を持っています。熊本城が同様に元の姿によみがえることを心から強く望みます。(玉置和弘)

※参考 松本正夫「広島城天守閣復原工事の思い出」(『支部報興城』No5)昭和50年発行
広島城発行「しろや!第9号」平成18年発行、広島城編集「広島城の50年」平成20年発行

おしえて!広島城博士14

本丸南側の入り口の石垣はどうして曲がっているの？
真っすぐの方が便利だけど…



おうおう！ かなり久々じゃのう。わしはこの広報紙「しろうや!広島城」からはもう忘れられたのかと思っておったのじゃが、5年ぶりじゃわい。

充電中わしは企画展で登場し、かなり進化してしもうた。前より現代的な姿に様変わりしたんじゃよ。え？前よりかっこいいって？ 前もかっこよかったぞ…

ところで質問じゃったのう。広島城本丸の入り口には、南側と東側の二ヶ所に門があるんじゃ。いずれも外側には土橋がある。そして南側には、かつては中御門があったが、今はない。右の図は、江戸時代の絵図(安芸国広島城図・広島城蔵、部分)じゃが、確かに90度曲がった向きに門がついておる。でも、もしも土橋のすぐ前に門があったらどうじゃろう？ 外から来た敵兵と一対一となるのう。しかしじゃ、このように曲げておくと、万一曲がっているこの四角い空間に敵兵が入り込んでも、味方は櫓や門の上の三方から攻撃できるようになっとるんじゃ。これで味方は大勝利じゃ。

お城には、こうした工夫が随所に折り込まれておるんじゃ。この四角いところを「枅形」と呼ぶんじゃ。上の絵図の真ん中、□で囲ったところじゃ。昔の計量に使う「枅(升)」の形をしている、「ますがた」、つまり四角なんじゃ。ま



た、お城の入り口は専門的には「虎口」というのじゃ。これを「こぐち」と読むんじゃ。で、虎口にあるこうした仕掛けのことを「枅形虎口」というんじゃ。お城の用語は難しいのう…。

そして、ここにあった中御門という門は、広島城の本丸の入り口にあたる重要な門であったため扉に鉄板を打ち付けた「くろがね門」と呼ばれる鉄の門で、江戸時代以前のもものが残されていたんじゃ。しかし、残念ながら原爆によって焼失してしまったので現在では石垣だけが残されておる。復元されていないため、今のところその面影はないんじゃ。愛媛県の今治城には、かつての広島城の中御門と同じような枅形虎口があり、正門にあたる鉄御門が近年復元されておる(写真下)。かつての広島城の中御門と本来の枅形虎口のイメージを知るには、分かり易い事例なので紹介しておくぞ。

(玉置和弘)

わたしのおすすめスポット

築城の時に見立てた？見立山は 広島湾を見おろす絶景ポイント

広島城は、天正17年(1589)に毛利輝元によって築城が開始されました。その際、どの場所に築城するかについて、江戸時代に成立した歴史書によると、天正17年(1589)4月の鋤入れに先立つ2月、近隣の土豪福島元長の案内により毛利輝元が広島湾頭を望む三つの山に登って城地を見立てたとされています(右上想像図・広島城蔵)。その山は、明星院山(二葉山)、己斐松山(旭山)、そして資料によって異なりますが、比治山もしくは新山の三つだったと書かれています。このうち、新山は現在ではその名も「見立山」という名称で呼ばれており、牛田山の先端部にある標高118mの山です(左下写真)。

しかし、実際には前年の天正16年(1588)12月18日の二宮就辰書状(「井原家文書」)に、築城が確定していたことが記載されていることから、築城の直前の天正17年2月に城地を見立てたという伝承は、後世に創作されたものであると考えられています。遅くとも天正16年末には準備が



進んでおり、翌年から本格的な普請が始まったのが史実のようです。

二葉山頂上は現在では広島城の方向の眺望は効きませんが、旭山及び見立山からは、広島城方面を見ることができます。特に見立山(左下写真)は眼下に広島の三角州、その背後に広島湾と宮島をはじめとする島々を見ることが出来、広島城とその城下町を知る絶好の場所となっています(右下写真)。また、ここからは二葉山と旭山を見ることが出来るだけでなく、広島城の天守も第五層の一番上だけですが見ることが出来ますので、是非登ってみてください。ちなみに、散歩がてら運動靴程度で十分登れます。時間は十分ではなく、下からゆっくり二十分程度かかるかもしれませんが…(笑)。(玉置和弘)



しろや
!
広島城

編集・発行

公益財団法人広島市文化財団
広島城

〒730-0011
広島市中区基町21-1
電話：082-221-7512
FAX：082-221-7519

平成28年12月28日発行

広島城利用案内

開館時間：9:00～18:00

(12月～2月は9:00～17:00)

入館の受付は閉館の30分前まで

観覧料：大人370円(280円)

高校生相当・シニア(65歳以上)180円(100円)

()内は30名以上の団体料金

休館日：12月29日～31日(臨時休館あり)

ホームページ <http://www.rijo-castle.jp>

「しろや!広島城」のバックナンバーは、広島城のホームページ(<http://www.rijo-castle.jp>)からダウンロードできます